

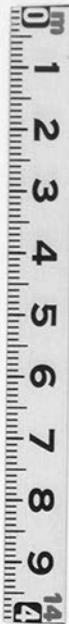
詩南車

昭和七年十二月廿五日納本
昭和七年十二月三十日發行

第二十九輯



詩 南 車
城 啓



詩南車 第十九輯 目次

句帳より (俳句) 渡邊何鳴

短歌
美崎一 戸部 斐 歌
黒江 寛 上 富 子
山野邊 青 岸 美 枝
佐々木 顯 眞 彩 夫
吉田 英 妻 上 六 花
白木 尾 新 磯 長 岳 澤 妻 信 一

1932年の回顧

赤字的な詩壇……片寄歌 二
歌壇勃興時代……白木 英 尾

詩
吉田 甫
片寄歌 二
山澤 岸
外澤 岸
四美 彩
篇枝子

車窓 口 雜報 口 社規 口 編輯後記

句帳より

渡邊何鳴

かたわらに小さきつむじや落葉焚く
あらはれし坊々の灯や霧の中
木枯の枯枝降りくるとぼそかな
短日の松影深き庭を掃く
ことごとくに凍傷の手をいたわりつ
店先に蕃椒あり初雪す

詩南車

第二十九輯

晩秋の松ヶ丘

美 崎 一 郎

晩秋の丘に風あり黒々と園丁一人松の枝を挽く
落ち來り地上ににぶき音立て、松の枝葉は暫しゆらげり
拂はれて切口白き松が枝に冬近き日はかげさやかなり
かたよりて櫻紅葉は沈み居り光り徹れる池の水底に
明日今日散りしにあらむ赤々と水底に榮ゆる櫻紅葉は
かりそめと思ふ病に日は立ちて百舌鳥の鋭聲の今朝を寂しむ
うつうつと午後をまどろむ部屋静か想念絶えて病みほけしわれ
検温器の硝子の棒の冷たさの今朝は身にしむ秋や深みし
めいめいに子等のとり來しあけびの實ほのかに甘き匂ひを放つ
手にとれば紫色の冷たかり熱れて割れんとするあけびの實
指先に力を持たしつと押せば白線さやかに裂くるあけび
乳白のあけびの果肉盛り上り仄かに黒く種子透きて見ゆ
茸とると山路のなぞへ踏みゆけば落葉濡れたり眞陽は照りつゝ
紅の笠純白の柄の美しさ手に取りて見る天狗毒茸
山深く朽葉を踏みふとさびし笠そりかへり茸はけり
山の氣の身に迫り來る静けさに松の梢の目を仰ぎ見る

灰色の中から

黒 江 寛

ふつふつと胸底にたぎる熱ひあり、夜寒の酒の身に泌みしこと
あめつちに凍て透る濃き寂けさを、破りて泣かん、風のごとく泣かん
あはれ我れすべて失ひし今さむさむと冬の木立に歩みとどめり
戀ゆえの訣別はかなしひぞかなる思ひ出はかなし、思ひ出はかなし
そばまれる生きのいのちよ、裂かれゆく望みよ、すべてわれ死すべかり

十一月と海

山 野 邊 青 市

溺れむとする者すがる藻といふはかなきたのみわれはするかも
汽車を待つ小廊に立ちて見るみちのくの山脈に雲ゆさわたる
汽車を待つや、長くしてうそ寒し、温乳をのみほしにけり
ひとり來て食ふ食堂の窓にはまり見ゆる嶺の雪陽に輝けり
車道を横ぎらむとし振返へるビルの窓より乙女のぞけり

飯坂の温泉にゆくころ思ひやめアスハルト路にわれつかれをり
用持ちて急ぎの汽車にきぞの日の暴風雨の記事を持ち入れり
近海に遭難顛覆の數多き慘事思へば心いたむも
一夜さの雨とこそ思へ百姓の流失稻束の慘害におどろく
渚邊へ下る砂丘のなだれ路にひそ／＼として鴉あそべり
あかね刺す真ひる明るき渚邊にあそべる鴉啼かざりにけり
濱一面敷き干す網に初冬の陽かげあは／＼照りてゐにけり

乳 吞 兒

佐々木

顯

母のまだめざめぬにはや乳吞兒は乳おもちやにし母に語らふ
雨の日にひさびさ君の訪ね來て旅の話は親しきものを
雨の日に沖は見えずも岸に寄する浪のうねりの音のおごそか
ストローズにつどふ村の子勇ましき雪合戦をきはひ語るも

壁 の 感情

吉 田 甫

ひしひしと來るこの壁の感情のこの冷めたさを私は愛する

母上の目だけが壁に生き残り、こちつと私を見守つてゐる
灰色のこの感情の壁のすつと奥の奥に我れ生きてゐる

この壁は——神經質の弱虫奴何んでそんなに腹たゞしいか
こふしもてたゞけど何の響なき奥知れぬこの壁の感情
この壁に耳おしあてゝことりことり我醫者となりて鼓動をはかる

灰 柱

白 木 英 尾

おれは一本のペンとなつて、ながい手紙を書いてゐる夜更け
手紙を書いてゐると眞實の自分がこんなにはつきりしてくるのだ
あいあいとわいてくる人の子の悲哀——あゝおれもおまへも
愛しており乍ら寥しさがあるけれども、嬉しい顔はしないでくれ
今宵おまへの純情を抱いてゐるのだ杳かに星はちろりちろりと
ひようびようとうと吹きまくる風が、おれの心臓をゆすぶつてゐる
ひようびようとうと吹きまくる風が、おれの思想へ火を點けていつた
失くなるものは失くなるぞいゝ、かんかん青い冬の空がある
どこかでほきはき枯れ枝を折る音！雑木林の冬の日だまり
おれの白い灰柱をくすし乍ら呆々として32年が過ぎてゆくのだ

1932年の回顧



赤字的な詩壇

片 寄 耿 二

一九三二年の詩壇を回顧して、その總決算をして見る。概観した所で格別華々しい詩も見られなかつた、が個人的に活躍した人と、新しく擡頭した新人が二三人、また問題となる別性質の作品、一二見受けられた事は嬉しい事である。

詩作品が、在來の價值標準をもつてのみ論ずることが出来なくなつた傾向がある様に作品價值を社會主義的色彩をもつて、別に創造しようとしてゐる人々がその主義と、その思想から、在來の藝術を一切のブルジョアの所産として否定しようといつてゐる。それと反對にそれ等の運動や思想

とは離れ、在來の藝術至上主義的、或は自然主義的な立場によつて作品價值を主張してゐる人もある。

たとへば、Aにとつては眞珠の玉であるものもBにとつては泥土に等しい様に、またその逆説が立派になりつてゐる。

此の意味に於て、本年度、活躍した詩人を見るに、前者に於ては、美澤光夫、唐木登志の兩氏があり、後者におへては黒江寛、吉田甫、佐藤正美の三氏がある。

此等の諸氏が一番、活躍し、足跡を残した人達である。

個人的な批評は極力避ける積りであるが、黒江氏は何時も一貫した詩風と優れた感情をもつて、

むり／＼と来る迫力がある。吉田氏はデカダンテ

ズムな詩風の中に、一つの哀愁を財へてゐる。これが眞の姿かも知れない。今輯の「軋られた感情」等は、氏の現在の生活を知るに一番手近なものである。佐藤氏は素直な詩を何時も書いてゐる。

唐木氏の詩に就いては色々議論もあるし、又こゝう云ふ詩を純文藝雑誌に發表するのは、どうかと云ふ意見もある。發表様式が文藝雑誌に依るとしたら、現在リアリズム（主としてプロレタリア・

リアリズム）と云ふ事が喧ましく叫ばれてゐる。これは現社會が決定してゐる、あらゆる文化に通づる一つの様式で、表現形式の上に、生々しい素材を、未完成でなく、充分藝術に生かすと云ふ事である。

唐木氏の詩は、その生々しい形態が相當目につく、その生々しさを充分リアリズム的に生し、働

きかけたなら素晴らしい詩が出来ると思ふ。兎角、唐木君はイデオロギーのあるものを、しっかりと掴んでゐる。相當問題性を加味して評價

さるべき詩であらう。本年度に於ける詩兩車の唯

一の收穫作品である。

次に新人として進出した人に、澤田枝、小林しげる兩氏と、窪田志、山岸彩子の兩氏の詩に注意する。澤田、小林兩氏は手堅いが、窪田氏はその持つてゐるセンチメンタリズムを清算すべきだと思ふ。その他回象に残つた人達には、湯淺照明、桑原勝雄、三村哲朗の三氏がある。

×

×

同人雑誌の創刊は九月に入つてから、ブラタナス、アラベスク、月刊文藝 純文藝を標榜して、相續いて出た。その内、ブラタナスは他二誌と幾分性質をことにしてゐる。

ブラタナスは所謂農民文學運動を高唱しての雑誌である。現在農村は經濟組織の改變から、疲弊し窮迫してゐる。都會人が考へてゐるような單なる、詠歎的な詩情そのものでなく、著しく近代色彩を帯びて來てゐる。その深刻さは都會の勞働階級に劣らない。

そして、土に生れ、土にかじりついてゐる彼等農民の眞の生活の意義を表現しようとするのが、

即ちプラタナス同人達の唱導する所の農民文學である。然し、唯々漫然と農民の生活を描き、土の生活らしいものを描いたとて農民文學ではない。

農民生活を社會的に觀て、正しく批判し、その人生觀を正しく表現し、現社會制度に於て農民がいかに苦んでゐるかを、そして農民等の心理と生活をどう支配してゐるかを描くのが農民文學運動の本領である。この意味に於てプラタナス同人達の運動に注目する。創刊早々なので内容に立入つての作品批評は避けるが、吉澤健、木田強南氏の努力を認めなければならぬ。その他三野混沌氏が詩を出してゐるのは大きな強みだ。

月刊文藝の歌壇に就いては白木氏が書いてゐる様であらうから、改めて書く必要を認めぬが、詩壇は主として民謡に働きかけてゐる様である。而して民謡詩人が二人も存在してゐれば止むを得ない事だ。その方面では小濱牧泉、薄葉ゆきじの兩氏を推す。その他は土地の人でない様だから批評は避ける。遺憾な事は郷土の雑誌は郷土の人をキヤッチして生産すべきだと思ふ。この點、編輯後記と

一致せぬ矛盾な感みがある。
アラベスクは見てゐぬから批評のかぎりではない。

次に、チャイナリズム(主として磐城新聞)の上に現はれた作品に就いて問題になる様なものを一々拾上げて見ると、美澤光夫氏が詩兩車二拾七輯の詩壇を、左翼イデオロギーの立場から批評し、堤光泰氏が時々隨筆と詩を發表してゐる。その作品發表が極少量なので、全貌を掴む事が出来ないが我々を示唆する所が多いと思ふ。珍らしく高瀬勝男氏は「漁夫の歌」の詩二三篇を發表してゐた。今迄と違つてぐうと落着いた詩を見せてくれたのは嬉しい。

その他、大井川みち子氏が幾分法律的理論を加味して詩兩車及び其の他を赤裸々に検討、批判してゐたのは注目に値する。相當文藝八以外のインテリに好感を持つて讀まれた様である。その他、詩兩車に對する批評は二三あつたが、いづれも未消的な偏執性からくる見解の相違で、抹殺するに

躊躇しないものばかりであつた。

尙、理論闘争としてチャイナリズムの採用する、馬場林島對吉澤健南氏の對立、浦島次郎對美澤光夫兩氏の論戰、その他二三、何づれも花々しく應戰して賑かであつた。然し、一見した所、盛んであつたが、實質的には、必らずしも盛んであつたとは云ひなかつた。盛らしく見えて、内容的には、盛んでなく、たゞ現象的に賑かであつたに過ぎない。

我々は今少し理論のまじめな把握を求める。要するに、理論の上と、その時々の問題に對して、いろいろ論すべき事が、かなりある、それを取り上げて論する人が、磐城文壇に、非常に乏しいのを、残念な事だと思つてゐる。

以上は大體一九三二年度の詩壇の清算である。この外、詩壇の特徴なり、傾向について、二三舉げて云ひたいが、その餘裕がなくなつてしまつたので以上で決算的批評は止める。餘り概念的で申譯

がない、歌壇の賑かさに比べて、餘りに赤字的な詩壇の存在であつた事を悲しむ。三三年度には、お互によつと強勉して、活躍しよう。

歌壇勃興時代

白木英尾

私が言ふまでもなく「今年は随分いろいろ事があつた」と、先づ誰しも思ふだらう。約一年間沈淪の後、五月中旬更生詩兩車が第二十六輯から續刊されて石城郷土歌壇に一つの提示をあたへて以來、作品的にも人事的にも、かなりいろいろの事が回顧される。小山田滋氏が、喧ましい歌壇雀共からヤレ都落ちなど、騒がれ乍ら入山探炭の人事係長となつて湯本鑛業所に收つたのが年頭一月であつた。古い太田水穂老門下の氏が一時は潮音社に叛旗を翻へして「現代生活」を第何號かまで出して後は、暫く、何處へ行く?の一人であつただけ、地方歌壇への天降りて歌壇人はわけもなく皆ホツとした。一方我々郷土歌壇に於ては、同氏

の高久晚霞氏訪問に因つて抑も今年の歌壇勃興時代を招来したと觀てよい。

× × ×
五七七の音律に據る文語使用の短歌に對しはゆる自由律に據る新興短歌が著るしく地歩を擴げてくる傾向にある事は、中央歌壇に於けると同様、郷土歌壇に於いても大なる關心事となつて來た。歌壇を縦斷するこの二つの流れが纏て五分五分の分布を以て對立する時、その後に来るものは、果して既成文語短歌の崩壊であらうか、中央に於けるこの問題に關する論議が一年毎に眞剣味を帯びてくる事は實に興味の存する點である。然乍ら、我々郷土歌壇に於ては未だ何らの新興短歌に對する批判檢討が行はれてゐない。これはおそらく今年度中での遺憾事であつた。總じて短歌作品に對する批評は殆ど無かつたと言つてよい。郷土に於て、すぐれた評論を缺いてゐる事は、郷土文化向上の上から寧ろ嘆かほしいことである。新聞に、主として磐城新聞であるが、いはゆる月評時評といふ様なものゝ權威ある存在が欲しかつた

と思ふ。これが遺憾事の第二である。偶々、詩南社に對する嫉視的反感から認識欠如の議論をする者はあつた様であるが、何れも天に唾する者の悲哀に終つた憾みがある。一般に、今年度の華々しい作品行爲に比して批判方面がこれに伴はなかつた。随つて、幾何の郷土作品が、自己批判乃至向上の基調をなしたらうか、蓋し次年度への懸案がこの點に胚胎するものではあるまいか。

× × ×
三月、詩南社第四回短歌會に次いで、好間短歌會があつた。五月「詩南車」が二十六輯から復活されて今年の前半季は終つたが、七月、同二十七輯が續刊され、十一月の二十八輯（發禁）後、第五回短歌會が開かれた。一方、同じ十一月には湯本町から「アラベスク」、小名濱町から「月刊文藝」がそれぞれ創刊號を出してゐる。九月か十月かにアラベスク短歌會があつた筈である。それより先磐城新聞では新しく「磐新歌壇」を設けて小山田滋氏が選者となつた。以上今年度中の主なる歌壇行事である。

× × ×
福島民報募集の郷土民謡に、新妻久満夫氏の作が一等に當選したことは、新妻氏のみならず石城歌壇の誇りであつた。歌壇人では、その他にアララギの結城哀草果氏の名も佳作中に見えてゐた。結城牧秋、天野多津雄、矢吹正衛の諸氏が手を出さなかつたのは、寧ろ賢明であつたと言ひ得る。然乍ら、歌壇人の民謡進出によつて、從來の民謡詩人のレーゾンデートルが嚴密に批判される機縁をあたへられたと觀られる。而のみならず郷土文壇に對する認識が緊密化して、郷土文壇確立の上に竿頭一步を進めたものと觀るべきであらう。

× × ×
宮田青波氏の死に就ては、「詩南車」二十八輯に高久、片寄、佐藤、美崎、磐城新聞に高瀬勝男の諸氏が追悼の言葉を載せて、いづれも純情の歌人を失つたことを傷んでゐた。氏夫妻の死が社會的に非常にセンセーショナルなものであつた事は、歌人として不偶に終つた氏の人生を、初めて充分に理解し、死を自體も自ら肯定されるに至つた

と思ふ。然し、我々の身邊からこの様な悲劇が生れた事に、誰しも驚愕の聲を發せず居れなかつた。眞に、いたましい人であつた。それから會津の結城牧秋氏が去月十一日逝くなられた。吉植庄亮氏主宰の橄欖社同人で詩南車にも一再歌稿を寄せたことがあり嘗て種々後援して下さつてゐたので一入哀惜の感が深い。縣内での第一人者であつたのみならず氏の死は中央歌壇に於ても一つの損失であらう。

× × ×
次いで作品方面にうつらう。今年度の郷土歌壇を顧るに際して、勢ひ、包容力の最も多い詩南社中心になる事は己むを得ない。吉田甫言ふところの乗合馬車である。郷土のペンマンは、これだけののだと思ふ。各自は中央の結社に於てこそ自己の主義思想を以て歌壇に存立してゐるものであるから、郷土にあつては相互の自制によつていはゆる趣味の集りをなすのがよいと思ふ。經濟的考察を怠り或は無視してまで蝸牛角上の對立をなさねばならない理由は毫も見出せない。故に嚴正

な意味での作品對立は中央歌壇の結社に求むるがよく、郷土に於ては無意味なる小分立を避けて大義に就くがよい。而て郷土人の綜合機關を確立する事は、目下の緊要事である。こうした觀點から將來、詩南社の包容力に俟つ所多いゆえんが背かれるのである。

初め書いた様に、一年の不振時代を過して今年是比较的作品行爲が華やかになされた。高久晚霞、新妻久満夫、永山徳一の諸氏はいづれの點から郷土歌壇のエベレストとして新來の小山田氏もろ共、健在である。島田忠夫氏また寧日なく健闘してゐる。敬賀に堪えない。我々は今年度に於て、作品し、模索し、自ら深く掘り下げた。「詩南車」「アラベスク」「月刊文藝」中の個々の作品に就てまで觸れる事は、紙數がゆるさながい美崎一郎、高木直吉の二氏は今年度に於て確實に歌壇の地位を築いたものと觀てよい。それから明日への飛躍を正しく約束づけられた人に、佐川和弘、山野邊青甫、熊谷金見子の諸氏がある。赤井嶺男、佐々木顯、山下多賀子、大平松夫、長瀬貞夫、石川梅

子、野村幸子、泉田友成、山岸彩子、原斐子の諸氏は「詩南車」中でも多かれ少なかれ取上るべき作品を示してゐた「アラベスク」では、田部きみ子といふ女性を私は見出してゐる。序いでに「月刊文藝」では濱野勲一といふ人を擧げ得るだらう。

新興短歌について見ると、私の「火耀短歌」休止後をうけて、新人に見るべき作品は少なかつた。野村幸子、窪田志朗の諸氏はその中でも自由律をよく把握して作品してゐた。黒江寛、湯淺照明、澤美枝、渡邊喜美の諸氏は前二氏と共に明日を待つて批判される人々として期待し得るだらう。新興短歌の發展過程やその形態に就いての常識は、我々の今更事新らしく語るまでもなく聞くまでもない所である。既に我々は作品時代に入つてゐる。先づ作品せよ！である。すぐれた作品を示すべく苦心しなければならぬ。公中に言つて、今年は新興短歌萌芽時代の一年を過したに過ぎない。私自身、まだまだであると思つてゐる。

夜・一つの感情

山岸 彩子

夜私は一つの聲をきいた
そこには
燈火と酒と驕笑があつた
それから
出たり入つたりする
人々の動きが
そして
女に興ずる
多くの人ごゑが——。
けれど
私はそこに忘れぬ
一つの聲をきいた
たつた一つの
眞實の聲の感情を——。

蒼ざめた瞳

澤 美枝

あふいだ空に蒼白い月が光つてゐる
その光が
白い川の水の行方をながめてる
あゝ
何と言ふ
蒼ざめた憂鬱な彼女の瞳よ！
凍つた硝子窓にへばりついた
一塊の薄霧が
月光にさへぎられた
あゝ
たまらなく憂鬱になつた私の心。

りんとうの花 戸部曙 歌

雑草の未枯し中にりんどうのむらさきの花むらがり咲ける
未枯し雑草中にきほひ咲くりんどうの花のすがしきろかも
活けなむと夜庭に切りし緋ダリヤのつゆおもき花姪ろにもたせつ
野をゆけばはなちの馬の遊びあつた馬なつきて吾れに寄り來も
長ぬかをさすりてやれば心よげに首をのばせる仔馬愛しも
久に見ぬメラストマーを今朝見れば開きかけたりこむらさき色
うれしもメラストマーの花見よとまづ知らせたり物洗ふ母に
庭園はまだ日射さすこの朝メラストマーを縁にはこびつ
未枯野やしみに時雨の降りそゝぬれ色さむきりんとうの花

かなしき夢 原 斐 子

障り子のはのはの明く朝となりかなしき夢は果てなかりけり
朝明けて床のうちなるわが思ひすぐれすなりて幾日つゞけり
かたくなのおん君ゆえに黒髪はまくらにそゝぐわが泪はも
いつとなく黙してとほく去りし人ちかひよ戀よわれは忘れじ
あてもなき君のたよりを待ちわびて過ぎし日のわびしきものを

車窓

○ 片 寄 歌 二

十二月に入つて、水石田に時々雪が光つてみえる。かんかんと靴底に雪が積つて來た。だれだつたか、冬は女の戀情が湧いて來ぬので詩が書けぬと云つたが。冷たくなつて僕の頬はその詩人の純情を感應して微笑するのだ。
寒尾よ、雨よ、皆んない、友だ酔ふと一緒に泣いて泣いてくれる。そして黒と白、正反對の線と横の正反對の顔して長い夜すがを僕とストロブの上に載つかけてくれる。いつ逢つてもなつかしい友よ。ペーパードライヴも、ベルモットも、そして、ゼニオレットも、酔ふて深夜の路地をさまよい乍ら夜月を感觸しよう。
寒尾よ、雨よ、今夜は、晩だ月が冴えてる。こんな晩に泣ける時があると云つて寄した、黒江寛にまた、寄せ書を送らうか。

師走の街に 池 上 富 司

ゆふがたの燈つけばそはと部屋にあられず街に出て行く
一つ一つしようにいんを見つゝゆく師走の街のおごり心はも
師走の街にともすればおこるおごりのおもひうち消しうち消し歩む
華やかな夜の街にあゆむとき有り金とばしとおもひいたりぬ
思ふ機働きも出來すその日その日のあやふいくらしは棄てしまへ
しごとはなれあるわれゆゑいつかひがみゆく心と知れるさもしさ
くづれたる石垣にうちたふされてあるコスモスに雪つたはりつきに落ちぬ
末紀病のスルドイ感覺「人間軌道」に注がれた焦點のない眼・眼・情熱が
凝固する (筆路二)

ライトの交錯する線と線。ボクは見のがさなかつた、ふくやかなプロセル
テンボの中に築かれた、ホージュウな脚と脚、觀衆の視線が静止する

村落點景 澤 美 枝

あれ果てた田に落穂を拾ふ雞の群れと村落の點景、風が吹くよ
村祭の太鼓が鳴つてゐるので過ぎし日の思ひ出が私のそばをよぎつてゆく

○ 黒 江 寛

平町の朗らかなヨタリスト、貴方がたの姿が目につきます。私もこの小さな郊外(市内とは名ばかり)で、毎日ヨタつてゐます。ヨタリストは、元氣で、朗々か、そして淋しがりで、憂鬱で、時に、とても強がりを言つてみたりして、カハイ、です。
私の家の近所には幾人かの、やはり朗らかなヨタリストがゐます。一緒にヨタを飛ばして笑つてゐます。私はむかしも今も機嫌のない「不良少女」らしいです。平町にはこんなカハイ、少女はゐませんか。阿々 (ある私信)

○ 吉 田 甫

今年も進む、歳晚の寒さがいたく胸に沁み透る、窓により添ふて半日人を思ひ、人生を思ふ。人々よもそつと静かにしてくれ。私は眠りたいのだ。眠ることはうれしいだが石さななことは更にうれしい。拾幾年前ミケランセロが讀んだ言葉がしじみと思ひ出さるゝ日だ。私は時としてひどく死を恐るゝことがある、だが作家にして創

ぼそぼそと雨が降る村路のたそがれ、子守がぬれてゆく
向ふの小屋におく霜の白さ！朝ごとに深みゆく冬の寒さだ
冷たい冬の足どりが潜んでゐる今朝の寒さに日は差しつゝ

朽葉の匂ひ

山 岸 彩 子

山の上は雲かゝれりと見るがうち木梢にばらばら雨の音する
夕ぐれはなにかはなしこの溪に朽葉のしめり冷たく匂ふ
鶴立ちて暮れひえびえし溪水のせせらぎひとつ透りてきこゆ
いさゝかのこと氣にかゝりねむられず床にひそみて虫の音をきく
悲しみもはた喜びも人に告げすもだして勤めはおろそかにされず
退出時のすぎし室ぬちにさす光り外窓の梧桐の葉は落ちはてゝ

雑 詠

長 瀬 貞 夫

山向ふは夕明り空いだきまらならに暮れなづみけり
淋しさは言わんすべし別れきし人を戀ひつゝ寝ねにけるかも

酔覺めののどのかわきに起きてみる今宵の月は暈かむり居り
霜とけし庭面をあさる雀等の小さき足跡は土ににじめり
木の梢に朝々を鳴く百舌鳥の聲とばしくなりて冬さりにけり
近くあると聞きつる陶汰の噂話老ひたる父には語らじと思ふ
長雨のたまたま晴れて今朝の陽に萬年青の縞はすき透りたる

小 雀

磯 上 六 花

小雀の羽音みだして静かなるうす陽の中に桐の實落ちぬ
朝焼けの空にくろぐろ数條の工場の煙立ち上りおり
秋の日は早くも暮れて野歸りの素足冷たく月影を踏む

洪 水

新 妻 信 一

洪水あとの廣き田圃のあちこちに流れ残りし稻束の見ゆ
夕闇に稻束拾ひ田圃行く農夫の影はかすかに見えぬ
一度も登らぬ山に今朝はふと登りて見たく友誘ひけり
霜白き山路の端に咲く野菊萎えしはみつゝ寒けなりけり

作意が失はれた場合は、いさぎよく死すべきである。最近では私もさうたいして長生をしいとは思はぬ、いい加減の處で、働き疲れて静かに死ぬといふことは望ましいことである。こまれ愚程私を弱らせるものはない。愛人の姿であるこの壁。崩壊仕様とあせつてゐる心を孕んで、あゝ今年も逝く。

○ 美 崎 一 郎

十一月の颪風後十日餘り立った
開夜のこと江名町の或漁船が港を出て盤屋崎沖を北方へ進んでゐた。するさ前方右手から非常な速方で船の灯が近づいて來た。舵手は慌てゝ左へ方向を轉じた。すると間もなく、また右手から同じやうな灯が近づいて來る。また之を左へ避けた。次々と灯が來る灯に氣を取られてゐた船頭達、はつと思つた時は、新舞子浦の白波が直ぐ眼前に追つてゐた。ストッパ機械が停められた。そして錨が投ぜられた。船は危ふく難を免れた。怖氣ついた船頭達は漁を止めて江名港へ歸つた。遭難後日譚、船商會の中の一つである。

○ 白 木 英 尾

五・一五事件で大義殺が殺られた時には、毎日、新聞を讀んでゐて、或る複雑な、熱涙——といった涙が止めどなく流れてきたが、こんどの森格の死にも、新聞を讀み乍らやつぱり涙が出てくる。殊に、會葬者中に交つてゐたといふ軍部少壯將校の姿を思ひやると、たまらなく涙が浮んでくる。
先には、時代の迫力に押し流される偉大なものへの哀惜であつたが、こんどは、先とは異ふ。一つの時代から、もう一つの時代へと吹きまぐる風の音を聞き乍ら死んでゆく彼の胸奥に、傍々と注ぎこむ涙である。そして、彼の亡骸から、私は、未だ生れきれない新しい日本の、一つの斷層を感じるのである。

新年小集

一月七日自午後五時
於 平町 コンパル
會費五十錢當日持參

海・砂の惜愁

小林しげる

海邊の砂の白さは
眼にあまりにいたし

同氣なく
すくひあげた砂の
さらさらとして　さらさらとして
指の間を
すべり落ちてしまふことは
さびしすぎる

冬

風が光る
遠い地平線に
しはがれた哀歌を合唱するもの
あれは冬のしゆくめいです

煙　突

すすくと
春の若草の様に伸びた煙突に
青空がつきさゝつてゐる

瞼にみる夢

湯　淺　照　明

じつと瞼をとちると
熱い涙となつて落ちくるは
緑色の卓布を滑る
薄紅の卓燈の様な
淡い想出である
懐しい想出である
胸一杯に擴つて行く
君の幻影よ

じつと瞼をとちると
熱い涙となつて落ちてくるは
そよ風に囁き乍ら

胸の湖

戸　部　曙　歌

瞳！黒ダイヤの瞳
そは吾が胸の湖
しつぱりとぬれて朝の汀を散歩する
しめつた白砂をさくく／＼とふんで
忘れられない人を求めて――

あくまでも澄んだ湖
私はオーイとありつたけの聲で呼
んで見る
きくたしかにきく
はからかに笑つてすんだ聲で
答るのかかすかに聞く彼女だ
よく晴れた朝の空に
可愛金齒がキラキラ光る
私はそれをまぶしい目でながめながら
又ホーイと呼ぶ

雑　報

◇ ビクニツク

秋のピクニツクは十一月六日川
前へ行つた。湯淺、山岸、片寄外
九名、十時半、自動車で川前到着
磐城耶馬溪の景勝を、各自、思ひ
のまゝの感情で、探勝し、自夢の
ボータルのリズムに、テンボを
合せ、終り天候には恵まれなかつ
たが、終日愉快な一日を過ごし、五
時、名残をおしんで歸る。

◇ 懇　談　會

十一月二十日郷土民○と短歌の會
終了後、午後四時半より詩南社懇
話會をマルトモ食堂に開く。
栗屋甫、赤井鐵男、池上富司、
片寄歌二、佐々木顯、佐藤政美、
白木英尾、戸部曙歌、新妻久満、
夫、山下多賀子、山野邊青甫、
湯淺照明、吉田甫、渡邊何鳴
等の諸氏出席、晚餐を共にし乍ら
懇談を取交し同七時散會。尙二十
二日、佐藤、吉田、片寄、白木等

◇ 消　息

組合、今回の後始末をなした後、
福島民報支局を訪問謝意を表す。
△月刊文藝 小名濱町佐川和弘、
高木直吉氏等の手で十一月十日
創刊(歌)直吉、和弘、忠夫等
(民謡及時)牧泉、ゆきじ等
△結城牧秋氏 十一月十一日逝去
訃告哀悼の意を表す。
△黒江寛氏 今月二十七日歸省
△水山健一氏(音雪)東京日日新聞
社募集の多門師團凱旋歌に二等
入選を受賞す。

社友かるた大會

日時 昭和八年一月一日
午後零時半より
会場 平町藤田女學校内
會費 金二十錢(當日持参)
檢興 福　引

主催 詩　南　社

◇ 小演奏會

一月中旬、片寄宅で洋樂レコード
演奏會を開く、同好者の來臨歡迎

時代意識

松　波

抑へられれば
抑へられる程
強く、反抗する人間の心理。
××は今、歴史の車輪を後に廻そ
うとしてゐる。
だが、廻つた車輪を戻すことは不
可能である。
この矛盾をどうすればいいだらう
時の流れは正しい

軋られた感情

吉 田 甫

感情ばかりで塗りつぶされてゐる
灰色い此の壁のかげで

昨夜又しても今宵
寂びしい母のこわ音がする

私は毎夜此の壁に寄り添ふては胸深く そのか
すかなる

呼吸をきく
こひ

戀です

×
歌二よ 英尾よ

今宵も亦、歴史の歩調に合せて「あけみ」を唄

ひながら

テーブルにこぼれた洋酒を
マツチを灯して

明日の日に新しい計画を
この部屋一ぱいに
眞蒼と燃やさう
×
あゝむん／＼と一切が燃えあがる
一九三二年十二月一日の酒場。
その中に在つて壁は
貪婪なタコのごと
生活に軋られた淋びしい瞳をうるませてゐる。

×
ブルデョアのノラ息子が
つまらない情慾のために
彼等の唯一の武器をもつて
この壁にのしかゝらうとする時があると
あゝその時、其の時だ
一切合切が、壁と共に

襪襦々々に崩れおちて、

私は狂人のごと、この世から消え去るのだ
あゝそれは餘りにも決定的なものなのだが
そして何時かはとり去られる壁なのだが

×

友よ、

新しい目の戀は

私にとびあがることを教へ

蒼い溪谷

鳩羽色の窓は蒼い溪谷に開かれてゐる

金星と董草の結婚式場。鈴蘭の花束を白鷺の
頸筋にぶらさげた詩人。薔薇をたべてゐた蜂が
聖なる祈禱を捧げる。果樹園の青い林檎は今夜
までの貞操ではなからうか。

窓の點景。蒼い溪谷で詩人は鈴蘭のやうに感
傷をちぎつて川に流してゐる。灰色の部屋で僕

二度目の戀は私に自殺することを教へてゐる。
勿論私は知つてゐる、
この道が唯一つの私の生きてゆくべき道である
ことを？
でも、もう私にはどうにもならないのだ
あゝ又しても壁のかげでは
寂びしい母のこわ音がする

片 寄 耿 二

は蒼い溪谷を見て居た。

風

ヴニスの夢は畫帳の中に褪色して人生の頁か
ら脱落した。二つに折れた感情の一個丈が光の
中に生きてゐる。

冬の泌みついた風が僕を旅へ追ふ。



郷土民謡と短歌の會

福島郷土民謡

新妻久満夫作
野口雨情補

- 1 玄如待ち待ちナア
盤梯山の
雪をいつまで出てみてる
- 2 會津東山ナア
こたつで雪見
思ひ出します雪の日は
- 3 共に乗りましょナア
三春の駒に
手綱はなしてどこまでも
- 4 向ふ萱原ナア
小笠で還る
空は夕焼け流れ山
- 5 風に吹かれるナア
勿來の櫻
じかも潮吹く濱風に

.....□.....

磐城高女教諭新妻久満夫氏の郷土民謡一等賞選披露並に詩南社第五回短歌會は福島民報社平支局と詩南社の合同主催で去月二十日平町マルトモホールに開いた午後一時、先づ正賓の新妻氏と前後して來賓の正木繁女校長が「私、女學校の正木です」さ心おきなく挨拶され乍ら休憩室へ入る。續いて、小山田滋氏が久しぶりに巨軀を見せる。縣議萩原義雄氏夫人たけ子さんの美しい御容姿が見える。折角お出での磐城高女教諭淡路辰五郎氏がお子さんの御病氣で直ぐ歸られる。同人や社友の顔も大分揃つてくる。一時半開會。折から四倉方面へ災害視察中の栗屋民報支局長が車を飛ばして磐城新聞主筆柏木哲（赤井鐵男）氏と共に來場された。

詩南社側から白木同人、新妻氏への祝辞をかねて開辭を告げる。次で小山田氏柏木氏交々立つて新妻氏への祝辭を述べる。終つて栗屋氏から來賓及各位の來會を謝し民報社側の挨拶がある。愈々「玄如待ち待ちナア」の朗讀（栗屋氏）がそれな作者新妻氏が詳細に註釋なされる。茶菓が出る。短歌の愛題「祝（出詠二十首）」「山（二十二首）」の詠草及互選用紙を配る「山」のみを互選（三首）。紀念撮影後、別室で栗屋、片寄、佐藤、吉田、白木等立會審査する。その頃、渡邊何鳴氏が往診歸りの袍を持って來會される。互選審査の結果左の通り入選した旨を白木同人から報告し、賑やかな合評にうつる。かくて和氣露々裡に午後四時、栗屋氏の閉辭で盛會裡に散會した。尙、今回の短歌會に東京日日新聞、磐城時報（各一個）磐城新聞（二個）福島民報（四個）の賞牌を寄贈されたので、それぞれ入選者へ贈呈する。各社の後援は衷心感謝に堪えない。

如待ち待ちナア」の朗讀（栗屋氏）がそれな作者新妻氏が詳細に註釋なされる。茶菓が出る。短歌の愛題「祝（出詠二十首）」「山（二十二首）」の詠草及互選用紙を配る「山」のみを互選（三首）。紀念撮影後、別室で栗屋、片寄、佐藤、吉田、白木等立會審査する。その頃、渡邊何鳴氏が往診歸りの袍を持って來會される。互選審査の結果左の通り入選した旨を白木同人から報告し、賑やかな合評にうつる。かくて和氣露々裡に午後四時、栗屋氏の閉辭で盛會裡に散會した。尙、今回の短歌會に東京日日新聞、磐城時報（各一個）磐城新聞（二個）福島民報（四個）の賞牌を寄贈されたので、それぞれ入選者へ贈呈する。各社の後援は衷心感謝に堪えない。

もりんどうの花

同七点 渡邊何鳴

ほうほうさ霧降りかりまなかひの巖も樹々も見えずなりけり

人各五點 赤井鐵男

梅子、美時一郎、原斐子、吉田儼の諸氏は短歌詠草を寄せて下さつたがそれぞれ

の御都合で欠席された。出席者は左の三十氏である。（いろは順）色川清、池上富司、萩原たけ、新妻育太郎、新妻尚子、新妻久満夫、新妻信一、戸部曙歌、小山田滋、大越こと、渡邊何鳴、渡邊清也、片寄歌二、吉田甫、長瀬貞夫、宇野源一郎、窪田志朗山下多賀子、山野邊青市、松浦富美男、正木貞二郎、相川四郎、栗屋市、赤井鐵男、佐藤政美、澤美枝、佐々木顯、鶴淺照明、志賀裕平、白木英尾

.....□.....

天 十一點 萩原たけ

きその日の嵐の名残り山肌はあらはとなりて寒々しくも

地 八點 原斐子

そうそりと水の音する山峽に夕寒みか

謹告

先月五日発行の詩南車第二十八輯は内容の一部當局の忌諱に觸れ同十四日發賣禁止處分に附された爲め多數社友讀者に不配の己むなきに至つたのみならず各方面に對し大なる迷惑を及ぼした事は遺憾至極に堪えず茲に謹んで陳謝の意を表す

昭和七年十二月 詩南社
片寄歌二

社告

白木英尾

右は第二十八輯(發賣禁止)編輯上の責任により第二十九輯限り詩南社編輯同人たる事を辭す

昭和七年十二月 詩南社

俳人乙字の句碑

青沼、井上氏等の發起で
來春松ヶ岡公園に建立

ホト、マス派の著名なる俳人として大正九年一月物故した大須賀乙字氏を偲ぶためこの程平町長青沼録太郎氏並に井上貞次郎氏等發起の下に乙字句碑の建立が計劃され目下大阪方面在住の俳壇門下關係者と種々接洽準備中である。

碑は平町松ヶ岡公園内の適當なる地をトし來春早々建立除幕式を舉行するとのことである。現俳壇の者宿たる高濱虚子河東碧梧桐等の故人友好關係諸氏十數名も來年參列することになつた。

乙字氏は舊平藩の漢學者大須賀珣軒翁を先考として明治十四年七月本縣相馬郡に生れ、少年時代を平第一小學校に學び第二高等學校を卒へて後四十二年東京帝國大學國文科を卒業したものであるが、少年時代の關係最も深い平町に句碑の建立されることは故人を偲ぶがごとくして甚に意義深いものと謂はねばならぬ。

名は續、四十一年東大卒業後、曹洞宗大學、麹町高等女學校の教職を経て、大正五年四月東京音樂學校教授を拜命從六位に叙せらる。同九年一月二十日東京小石川の假寓にて歿す享年四十俳句を子規に學び「乙字句集」「乙字俳論集」「乙字書簡集」「古人春夏秋冬」乙字選碧梧桐俳句集等の著書がある。殊に氏の俳論に至つては實に當時の俳壇を風靡したものでこの點を俳壇家としての名があつた。氏の俳論、書簡、隨筆などは今日の中等學校や高等學校の教科書中にも收録されてゐるのみならず、故人生前の論敵であつた虚子氏などはいかなる會でも同席することゝ恐れ、乙字氏が見えろといつたまにか歸つてしまつたといふ話である。それほど彼の論議は辛辣であつた。來春舉行される除幕式にはその虚子氏が往時を追憶し乍ら欣然參列を請されたのは蓋し斯界の榮幸であらう。

詩南社社規

- 一、詩南社は詩歌を中心として郷土の藝術を愛するもの、集りである。
 - 一、詩南社は客員、同人、社友から成り社友を分ちて特別社友普通社友とす。
 - 一、詩南社は隨月雜詩「詩南車」を發行社友に頒ち隨時種々の集會を開く。
 - 一、雜詩「詩南車」の編輯は同人中の適宜の編輯同人が専ら之をなす。
 - 一、客員、同人、及び社友の作品は雜詩「詩南車」に掲載する。而てその選擇整理は編輯同人たる者の責任とする。
 - 一、客員は詩南社を授け郷土文化の發達を期するものとす。
 - 一、同人は雜詩「詩南車」へ恒に寄進する作品を載せて、且つ詩南社一切の責務を負ふものとす。
 - 一、社費は年額とす。(但、前納及び分納の何れによるも差支へない)
 - 同人費 金六圓
 - 特別社友 金貳圓
 - 普通社友 金壹圓
 - 一、客員或は同人三名以上の推薦ある者を新卒に同人とすることを得。
 - 一、社友五名以上ある町村に支社を置く
- 昭和八年一月

編輯後記

×先輯禁禁の後をうけて、特に原稿催促をしなかつた爲めあつて、原稿の集りは感かつた。然し編輯部だけでも仕上げる覺悟で済んだだけのものが出来た。

×もとより詩南車は作品闘争の機關でなく、純詩歌の雜誌であるから、先輯思はざる發禁の災は全く編輯部の過誤であつた。この点今後深く戒心して一般から誤解のないよう努めなければならぬ。

×今年度の回編輯片寄氏が幾分批判的に白木氏が直線的に書いてゐる。從來我々の身邊にはかうした回編輯事が殆ど無かつたが、足跡を更めて検討しておく事は必ずしも駄目でない。次年度の展望がこれから行はれるであらう。

×とまれ、我々は次年度の新しい飛躍を各位の前に約束する。詩に、歌に、そして郷土文壇の確立へ我々の目標はこれである詩南社のレーゾンテエトルは益々大きく價値づけられる日が来るであらう×終りに多幸なる迎春の慶びを申上る。

投稿者へ

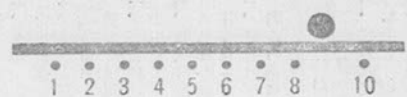
- △投稿は詩及び短歌に限る。必ず原稿用紙へ楷書で正しく書くこと。
 - △社友以外でも投稿は自由。住所姓名は明記されたい。誌上の匿名は可とす。
 - △投稿の取捨は編輯者は一任のこと。
 - △選者の原稿は雑誌に載せない。尚原稿返戻には必ず附封、三十日までに二錢。
 - △送稿には必ず附封、三十日までに二錢。
 - △宛名はすべて必ず左記宛にされたい
- 福島縣平町五丁目二八

詩南車編輯所

次輯原稿締切 一月末日

昭和七年十二月廿五日印刷
昭和七年十二月三十日發行

福島縣平町五丁目二八
編輯兼發行人 片寄歌二
印刷所 二葉印刷所
發行所 詩南社
頒價拾五錢 送料貳錢



1 2 3 4 5 6 7 8 10

K • K A M A Y A

目科療診

内科、小兒科、婦人科
外科、耳鼻咽喉科
皮膚病、花柳病科
レントゲン科

宅診午前・往診午後

院長 醫學士 高久 忠
副院長 新潟醫學士 赤羽 清
藥局長 藥劑師 佐竹 菊雄

平町田町六十四番地

高久病院

電話五一三番

三猿文庫